

# 大地

第 43 号  
2013. 5. 10. 発行  
浄 國 寺  
上越市町3丁目14-10  
☎025-523-5724

## 俳句

北窓に日脚戻りて春近し

山崎 睦

一寸だけ老の贅沢新茶買ふ

気の重きこと背にたたみ夕端居

湯上りの懐緩め団扇風

涼風の通るあたりに机置く

香水の香りの中にすれ違ふ

老斑も生きし証や枇杷の花

降り暗む雪に心は暗からず

正し見る八十路の姿初鏡

(平成十年作)

## 破鏡と仏滅

山崎 慎子

今を遡ること四十四年前(あーそんなにも時は過ぎたと今更ながら思うのだが)私達は本当にささやかな婚礼を挙げた。この浄國寺の本堂で。

おいで頂いたのはごく身近な親戚のみ。私などは両親と二人の伯父、そして兄弟を代表して次兄だけが列席してくれた。友人は誰もお招びしないという、誠に質素な式であった。念のため言い添えれば、お招びしておいで頂けなかったというのではなく、私達二人が、とにかく質素に地味に、と望んだ結果がこうだったのである。

夫は新調のスーツを着て、私は兄嫁さんである義姉の、結婚の時の振袖を貸して頂いて式に臨んだ。

着付は、ご門徒の山崎パーマ屋さんが二人がかりで髪を整え、しっかり仕度を引き受けてくれた。高島田も結わず、打ち掛けも着ず何とも変り者のヨメさんが来たものだと、内心呆れたのではないかと思うのだが「事件」は、その着付けの最中に起こったのである。

義母の結婚の時に持参した鏡台を借りて仕度をしている最中に、その鏡が割れてしまったのである。全く突然、バリーン、ガシャン

ガシャンと崩れるさまは、まるで私はもう役割を終えましたから……と言っているようなものだった。

広辞苑によれば破鏡とは「夫婦が離別すること」とある。単純に考えても、婚礼に鏡が破れるとは穏やかなことではないだろう。

しかし美容師さんはあくまで冷静に破片をかき集めて片付け、取り繕うようなことを一切口にしなかったのである。見事というものである。

四十四年間、勿論もちろん危ないこと、怪しい時をくぐり抜けながら、それでも何とか破鏡には至らず、こうして今日がある。

占い師ならそれはお母さんの鏡が、お二人の身代わりになられたのですよーとしかつめらしく言うのかもしれない。

ちなみに、その結婚式は六曜では『仏滅』であった。

この度、本堂前庭に藤棚を造りました。藤の花を楽しむまでには時間がかかりますが、憩いの場としてご利用下さい。

種田山頭火が、紫雲藤の棚下で遊ぶ幼稚園生を詠んだ次の句は楽しそう

藤棚の下いつせいにおべんとうひらいて

皆さんと観藤会でも開きたいと思えます。お酒も料理もそろえて

(隆昌)

## 【春十句】

風間汀爾

ハイヒールの音乾きたる余寒かな

万木に先立つ梅の吐息かな

奥入瀬の水ふくらませ雪解風

春雨や木ぬれに揺るる玉飾り

養花雨卒業の子に降りかゝり

厚き史書の進み荏苒花曇り

春泥の長靴乾く建仁寺

居酒屋の灯の道遠し春の泥

花に疲る旅にかしこし古都の酒

み仏の丹田美し甘茶水

風間さんは、東京目黒にお住まい  
長年金融関係の仕事に従事された。  
御年九十四歳。かくしゃくたるもの

## 晩秋の参拝旅行

和田寺町 小池八百枝

昨年十一月浄國寺・法林寺両寺院様主催の旅行に三十一名の一員として参加した。

一日目、先ず名古屋別院へ。丁度一如上人の法要が営まれており、多くの参拝者と共にご法話を聴く事が出来た。次は金鯢がシンボルの名古屋城。好天に恵まれ天守閣から市内を眺望し、菊花展に心も和む。一泊目は名古屋国際ホテル。三々五々面白い物、夕食を楽しむ。

二日目、以前浄國寺様よりお聞きしていた清沢満之記念館・西方寺へ。今日私達が親鸞の教えに出遇う道を開かれた清沢先生の一生の話、書斎や終焉の部屋などを見、改めて自己とは何かを考えさせられる。その後徳川美術館へ。先に館内の宝善亭でちよっと贅沢な昼食を満喫する。美術館では茶道具等歴史的名品の数々を観られ大満足。惜しむらくは短時間だったこと。もう少しゆっくり鑑賞していたかったなァ！

日本三大観音の一つともいわれる大須観音では商店街をよく歩いた。

夜は長良川温泉で疲れを癒し大宴会。二次会に柳ヶ瀬飲食街へ出かけた人達もあり、留守番組には分からない面白い秘話があるらしい。

三日目、和紙とうだつの上がる町並の美濃市。宗祇水や踊りて有名な城下町郡上八幡。どちらも現地のボランティアガイドさんの案内で、ついに降り出した雨の中を散策見学。旅の最後は南砺市へ。道中飛騨の峠一体は雪となり、ドライバーさんはチェーンの脱着等で大変だったが、車中では紅葉と白銀の美しい景色に一同歓声をあげた。

到着した光徳寺では蓮如上人御自作の阿弥陀仏（御厨子の内）にお参り、棟方志功、他民芸巨匠作品、世界の珍しい民芸品コレクションに接し眼を見張る

十二月の雪の日、法林寺様宅での反省会、旅の名場面を大スクリーンで見ながら歓談した。

この度は沢山の発見や体験、素敵なお方々との出逢い等とても有意義な旅だった。お骨折り下さった両寺院様に深謝申し上げます。

### 「浄國寺史」のこと

次ページ「浄國寺史」は、長男隆史の文です。現在長男は、高田別院の『真宗学院』の学生。毎週土・日の夜間、通学し学んでいます。この「浄國寺史」は、学院提出リポートを一大地一用に書き改めたものです。

(隆昌)

# 浄國寺史

山崎隆史

永祿二年（一五五九）近江山崎氏の三男が出家し賢西と号し、春日山麓茶畑村に庵を結びました。上杉謙信に招かれ、二〇〇石を頂いたとする文書もありますが、よく分かっていません。近江山崎氏は宇多源氏の一派、佐々木氏の支流だそうです。佐々木氏の家紋は「四つ目結」、近江山崎氏の家紋は「檜扇に四つ目結」であるのに対し、当寺の家紋は「笹竜胆」と「檜扇」です。



元々浄興寺の檀家の立場であり、寺となつてからも長らく浄興寺の末寺だったようです。慶長七年（一六〇二）、浄土真宗東西分派の際には、浄興寺と共に東に属しました。

浄國寺の寺号がどの時点で許されたかは分かりませんが、永祿二年の茶畑村の時点で既に名乗っていた、文祿五年（一五九六）顕如の影像を下付された時に許された、慶長一年（一六〇六）親鸞の影像を下付された時に許された、の説があります。ただし、文祿五の顕如の影像の裏書には浄國寺

の寺号は無く、慶長一年の親鸞の影像の裏書には浄國寺の寺号があります。いずれの裏書も「浄興寺門徒越後國頸城郡下之郷春日桑畑町」と書かれています。

慶長三年（一五九八）、上杉景勝が会津に移封となりますが、賢西はこれに付き従つて会津へ行ったとも言われています。ある文書には更に命を受けて出羽谷口銀山（山形県北東部）に移つたとあります。真偽は不明です。後、春日山の茶畑村に戻つたという事です。福島城が築城されると福島城に移つたと伝えられます。この時期の動きは文書により食い違いがあり、はっきりしません。

高田城が築城された後、寛永一三年（一六三六）までに大鋸（おおが）大工町に移転しました。大鋸大工町は、現在の仲町六丁目二番地付近のようです。

寛文五年（一六六五）、寛文地震（高田地震）により高田城下町が大きな被害を受け、復興に際して寺町も再編されました。元々は現在の線路付近と表寺町に並んでいた寺院群を、現在の表寺町と裏寺町に、西にずれた位置に配置しました。また、それまで本誓寺以北は空き地だったのを、寺院を移築して下寺町としました。この時に、当寺も現在地へ移転し、現在に至ります。

【年表】（●以下が浄國寺に関する事）

永祿二（一五五九）●賢西、春日山麓茶畑村に庵を結ぶ

永祿一〇（一五六二）上杉謙信、浄興寺を招聘

天正四（一五七六）謙信、本願寺と和睦

天正六（一五七八）謙信他界、御館の乱

天正八（一五八〇）石山合戦終結

文祿元（一五九二）顕如他界

文祿二（一五九三）教如、退隱を申し渡される

文祿五（一五九六）●賢西、教如より顕如の影像を下付される。

慶長三（一五九八）上杉景勝会津に移封、堀秀治入府、豊臣秀吉他界

慶長七（一六〇二）烏丸本願寺（東本願寺）建立、東西分派、●東派に属す

慶長一（一六〇六）●賢西、教如より親鸞の影像を下付される。

慶長一二（一六〇七）堀忠俊が福島城築城

慶長十五（一六一〇）越後福島騒動、堀氏改易

慶長十九（一六一四）松平忠輝が高田城築城

寛永一三（一六三六）●大鋸大工町に移転

寛文五（一六六五）寛文地震、●下寺町（現在地）に移転

大正四（一九一五）寺町の大火●本堂焼失

# ワン公物語④



蓮のつぶやき



山崎蓮（慎子代筆）

私はれん（蓮）。バグという種類の犬。十三歳の雌である。原産地はエジプト説と中国説と諸説があつて、主に王侯貴族や僧院などで愛玩されていたという。

でも現在を生きる私にとって、昔々のことはあまり興味の無いことで、今こゝに居るといふこと、山崎さんチの子になつて妹も居るといふこと、そのことの方がはるかに大事なことだと思つてゐる。

ところで、ここだけの話なんだけど、私は犬のくせに散歩が嫌いなのだ。若い頃はそれでも結構楽しく散歩していたのだけれど、いつの頃からか苦手なものになつてしまつた。一蓮、おはよう。散歩に行こう」と父さんが呼ぶ。今日も元氣、ニコニコ顔だ。その瞬間は、とてもとても嬉しい。「あ！父さんだ。父さんだ。お外だ」と思う。けれど玄関に行き、綱をつけて貰つたりする頃になると段々気分が沈んでしまふ。

ウチの庭を出る迄はまだ良いのだ。通りに出た途端「イヤだなア、歩きたくないよ、それより早く朝ご飯が食べたいなア」となるのだ。五メートル歩いて立ち止まる。促されてとぼと歩きます。三メートル歩いて振り返る。「ウチに帰りたいなア」なだめられて、

また歩きます。尻尾はずつと下がつたまゝだ。バグの尻尾はお尻の上にクルリンと、一回り半巻き上げて乗せているのが普通で、それがカッコ良いことも分かつてはいるのだけど。

散歩の前半は、いつもほぼそんな感じで父さんをしてこずらせる。時にすれ違ふ人が一どうしたの、歩くのイヤなの？と笑いながら声をかけ、その都度父さんはバツの悪そうな顔をする。「父さん、ごめんなさい」と心の中で少しだけ思うのだけれど、父さんの決まつたコースを足早に歩く散歩は、高齢犬の私には少々キツイのだ。

散歩が中盤を過ぎたと思う頃、場所で言えば本町五丁目のロワジュールホテル辺りにさしかかる頃になると、氣力が甦つてくる。あと半分歩けば朝ご飯が待っていると思うと、食器に入れられた私のゴハンが目の前に浮かび俄然元氣が出るのだ。

そこからは殆ど立ち止まらない。足取りも軽やかになるのは自分でも不思議。

散歩が嫌になつたのは多分、年のせいと寒がりのせいだと自分では思つてゐる。獣医の先生が言っているのを聞いたことがある「こういう短頭種は体温調節が苦手なので、暑さ寒さに弱いですからね、氣を付けてやつて下さい」それからこうも言つてゐた。「もしかするとバグは猫よりも寒がりかも知れませんが」寒い日、私はよくコタツの中でまゐるくなつてゐた。父さん達は「犬は裸足で庭かけまわ

りよつていうのに、どうなつてゐるんだ？」と呆れている。二人とも分かつちやいないな私は本當に寒がりなんだから。

父さんは超真面目な人なので、一度決めたことをなかなか崩そうとしない。散歩もおさんぽではなく、トレーニングのようにたつたか早足で、いつも決まつたコースを歩く。どちらかと言えば、私は道草をしながらのおさんぽが好きなんだけどなァー

その点たまに母さんが一緒の時は「今日は川端の桜の様子を觀に行つてみよう」「あそこのバラがきれいな頃なんだけど」と言つて違つたコースになることがある。そんな時父さんは、やれやれといったふうにごコースを變更するのだ。

父さんと母さんが一緒に散歩してくれるのが、ほんとはいち番うれしいのだけれど、母さんは朝が苦手だし寒さにも弱い。二人して私のことや町並のことを話ながら歩いてゐるのは仲がよさそうでいいなと思ふ。

私はシャイな人見知り、犬見知りだ。散歩の途中、よその犬に出くわすのも嫌なことだ。相手が大きかろうが小さかろうが、よその犬は苦手だ。

でも元々はよその犬だった華だけは例外である。七年も共に暮らせば、もう立派な相棒であり、愛すべきライバルというところ。でもこんな私の氣持、華のヤツ分かつてゐるのかしら。たとえ分からなくても、ま、イイか。